なくこれを剝かして呉れてゐる。大正十三年臨時議會に於いて貴族院の玉利喜造氏は高橋農商務大臣に對する質問中に農商工の利害相反することを述べてゐる。「農と商工とが一省にあると農はどうしても工商に押され勝ちである例へば惡いかも知れぬが農が商工と二つになつてゐることは農の爲めには商工は恰も獅子身中の虫といつてもよからう。故に農と商工とは利害の相反するものであるから産業振興の立場から考へて分立は一日も忽にすることは出來ぬ急務と信ずるが如何」と云つてゐる。「獅子身中の虫」は農工商鼎立の假面を剝かうとするものである。温穩なる貴族院議員にして尙この言がある。農相はこれに對して「玉利君は農と商工とは利害相容れざる如き意見を述べられたが私は遺憾ながら玉利君とは根本に於いて所見を異にする。即ち私は農と商工とは兩々相俟つて發達し以つて地方中央の産業を振興せしむるものであると信ずる」と答へてゐる。この答が農工商鼎立主義であることは明かであり上來その成立の不可能を論證した處である。農工商鼎立と云ふやうな

寢心地のいゝ子守歌に搖ぶられ假眠を貪つてはならぬ。

左するか。或は右するか。そこには中間の何ものもない。官吏、政黨、學者、軍人、その何れが健全に行くべき道を知るものであるか。地位と名譽と虛榮と私利との色盲者流に、この大局の運命を托することが出來るであらうか。私心を離れて國事を憂ふるものは、先づ我が良心を支柱として立ち上がらなければならぬ。農村の運命を決し、全國民の福利と生存の基礎を與へるものは、農民そのものでなければならぬ。實に自覺あり良心ある農民そのものでなければならぬのである。

(1) Dostoevsky, Brothers Koramazov. B. 6. 3.
(2) Hobson, National guilds. p. 109.
(3) Hobson, ibid.
(4) 貴族院議事（大正十三年七月五日）

第二章　農業立國の提案(一)

世相は多く眼前に走り眞理は常に背後に顯はれる。累進的利潤の收得は國際競爭のたゞ一つの目的である。經濟戰に依り、政策戰に依り、時には鐵血戰に依る。あらゆる競爭と戰爭との目的は、如何にして有利なる經濟上の地位を獲得するかに在る。縱斷的國際間の經濟戰が酣である時、各國民の內部に橫斷的な爭鬪が芽ばえして、それが國際的に擴がらうとしてゐる。累進的利潤收得の企業に向つては全く大なる威壓である。この潮流の餘波はもとより農業にも及んでゐる。小作爭議の頻發はそれを裏書きしてゐる。然しかうした潮流の根源は、累進利潤の商工業に對する反抗である。守るものも攻むるものも、商工產業の方面に於いて白熱する。守勢の陣容も攻勢の戰術もこの方面に於いて

最も新しいものが創造される。農業は攻守共にその變形に過ぎない。

農村が現在經濟力の中心でなく、又農業生産なる形式が、近代産業の本質ではない丈けに、農村に於ける地主小作の勝敗は、經濟上の組織に必ずしも大なる變化を與へるものでない。かりに總ての小作農が自作農になれば、地主なる階級は自然消滅することになる。それかと云つてこれが農業生産を根底的に覆す筈のものではない。そは農業が累進的生産でないからである。大農制小農制の得失に於いて、幾らかの差異はあるとするも、機械工業と手工業との如き差異のあらう筈はない。さうであればこそ優柔不斷な政府さへも、自作農創定案を出し、二百有餘年間に全部を自作にし、小作と地主とを消滅さす案を提出するのである。然し年限の長短は別として、都市工場の勞働者を、低利資金の融通に依つて、全部工場所有者にすることが出來るであらうか。若しこれが出來たとするならば商工産業は實質的に破壞される筈である。そこには累進的な利潤が成立しないからである。農業生産の眞髓破壞せずして、すべて小作を自作農に

することは出來る。然し商工生産の實質を破壞せずに、全勞働者を實力ある株主にすることは出來ない。それは資本と勞働との二要素を對立せしめなければならぬ。さうである限り近代解放運動の白熱するのは商工産業であらねばならぬ。累進的利潤の爲めに惹き起された商工業不安は、必ずしも累進的ならざる農業そのものゝ不安ではない筈である。こゝに農業立國の新しい提案が生する。

横井時敬氏は農業の効用として次の九項を數へてゐる。[1]

一、農業は最も重要なる生産業なり。
二、農業は國民に食料を供給す。
三、田舍は都會に比し人口の自然的增加多し。
四、田舍の人は都會地の人より長命なり。
五、農業は安全にして商工業の如く戰時などに打撃を受くること少し。

六、農業は商工業者に比し獨立經營者の數多く、從業者僕婢等從屬的地位に立つもの少し。
七、農業者は秩序の維持者なり。
八、農業者は強兵の源泉にして國防上必要なり。
九、農業者は社會國家の中堅にして其元氣の基くところの階級なり。

穩當な見方である。然しこれらの効用を精密に考慮し、且つこれを系統的に考へて見る必要がある。第八項の農業は強兵の源泉であると云ふが、これはたゞ農業は身體强健な壯丁が多いと考へるべきであつて、農業が軍國主義の源泉であると考へてはならぬ。何となれば現代の軍國主義は、累進的利潤を獲得しなければならぬ商工業生產の產物だからである。少くとも現今では世界の市場を爭ひ、國際的經濟の優勝をかち得んが爲めに戰爭が開かれ軍國主義が生れる。然し農業は現在かうした野望を持つものでもなく、又實に持つことの出來ぬものである。經濟的に見ても農業より擧がる收益を以つて商工生產國の軍

資に敵することは到底出來ぬことになり了つてゐる。たゞ農村は强健な壯丁を勞兵として送り、軍卒として從軍させるのみである。第九項の農業者は社會國家の中堅にして、其元氣の基くところの階級なりと云ふその元氣が、鼓腹擊壤の平和の中にたゞよふ元氣ではなく、事に臨んで勇を好み、戰に臨んで死を急ぐ好戰的な侵略的な元氣であるとするならば、それは眞の農村の元氣ではない。農村は平和を愛する。都市よりも遙かに駘蕩たる泰平の生產に慣れてゐる。第四項に擧げられた田舍の人は都會の人より長壽なりと云ふ心持ちの世界に慣れてゐる。たとひ農村が都市に比して好戰的であると云ふ表面の例證が擧げられるにしても、それは農民が單純であり質朴である爲めに、都市に於ける好戰的な煽動者に乘せられる機會が多いと云ふ丈に過ぎない。農民の生活は都市に比して自然であり、又實に愛好者である。都市の氣風が進取的であり、肉食獸の本能に生きるものであるとするならば、農村は保守的であり、草食獸の本能を主として組織されたる團體であると云ふことが出來る。

第七項の農業者は秩序の維持者なりと云ふのは、近代産業の都市に於ける秩序ではなく、もつと自然な、もつと人性の本能に適應した自然の秩序を維持すると云ふ意味でなくてならぬ。かうした農村を基準として建設される社會があるならば、それは都市標準の社會秩序とは全く別のものであることを豫想しなければならぬ。

第六項の農業は商工業者に比し獨立經營者の數多く、從業者僕婢等從屬的地位に立つもの少しは、眞髄に觸れた性質であるが、結局これは農業は著しき累進的利潤を貪るものでなく、從つて著しき勞働の搾取を要する産業ではないことを證明する事實である。上來の諸項を纒めるならば、農業は自然な産業であつて、人爲的な累進利潤を求めないものであると云ふことに歸する。そしてこれら九項の中最も重要なるは、第二項の農業は國民に食料を供給すると云ふことである。生活の根源は食糧にある。食糧に於いて不安な社會は決して健全でない。然し商工業生産は必需品なる食糧を生産するものでなく、少數の例外を除いては、華美な贅澤品を生産する。益軒の所謂「綾錦を製し繡染を事とする者」であり、實に「古の明王」がこれを抑へたものである。富が集積され、贅澤品が國民生活の標準となる時代に於いては商工業は存在するであらう。然し富の集積が一定の度に達し、商工業不安が國際的な現象である場合には、立國の大本は寧ろ古明王の食糧本位に歸らなければならぬ。茲に農業の最も重要な强みがある。約言すれば農業の眞の美點は、食糧の生産であること、それが生産としては累進利潤を貪らざること、そして生産の全面に渡つてそれが自然であること、この三者に歸するのである。

近代商工業不安を離れ、都市の壓迫から農村を救はうとする一つの傾向として、勞農露國の立國を考ふることが出來る。この根本政策が何う云ふ結果に到着するか。勞農露國は今實に試驗管にありと云はれてゐるやうに、誰れに取つても疑問であり試驗である。事情に通ずれば通ずる程疑問の度は濃厚であるたゞ外觀者の問題であるのみならず、勞農政府自らこれが問題であり、試驗であ

ることを承認してゐる。たゞ普通の外觀者と異る點は、彼等に主義の確信があり、實行に強い熱が盛られてゐることである。彼等の將來をトするものは、かゝつて以つてこの確信と熱誠とにあると云はなければならぬ。

もとより露國は本來の農業國である。かうした特別の事情の爲めに勞農露國が實現したと考へられるであらう。然し上來考へたやうに、商工業不安が世界的であり、人間の絶對的必要品が食糧であると云ふ二點よりして、農業立國が再び世界的に注目される問題にならなければならぬ趨勢にある。特別の事情は事情として切り離すも、尙こゝに一般世界に共通な、可能な原則も認められるであらう。然し何れにしてもそれらが試驗管中の現象であることを忘れてはならぬ。そしてそれと共に、この重大なる試驗を閑却してゐてもならぬ。結果の重大なるものは試驗も亦重大だからである。

勞農露國の農業政策を知る爲めに、川上俊彦氏の勞農露國に依る。[3]

「農業は露國產業の大宗であつて、農民は全露人口の四分の三（註川上氏は四分の三としてゐるが、カウツキーは五分の四若しくは六分の五としてゐる）を占めて居る。從つて農業の興廢は國家の隆替に關し、農民の向背は政府の安危の岐るゝ處である。ソウエート政府も此間の呼吸はよく心得て居て、常に農民の好感を迎ふることに汲々してゐる。共產黨の根本主義を枉げて新經濟政策を實施した上、世界中で一番輕いと稱せらるゝ單一現物稅を設けたのも、原因をたゞせば悉く農民の反抗を虞れた結果に外ならぬ。露西亞共和國憲法第三條は土地の社會共有を實施せんが爲めに個人の所有權を撤廢し總ての土地は之を一般民有となし、何等賠償することなく平衡使用法を基礎として勞働者に交付す。又總ての森林、地下の富源水利地主所有の家畜及び農具、模範農場等は之を民有とすと規定してゐる。……土地を勞働者に衡平に分配する方法に關しては、隨分やかましく規定してあるが、要領は勞力均分主義に基いて、各地方に於ける土地使用方法の慣習に從ひ、（一）各農家の現在人員の勞働能力に超過せざること、（二）農民家族を貧窮ならしめざることを標準として分配を行ふ

のである。從つて何人も、自力を持つて耕作し得る以上の土地を使用することは許されないのである。此勞働能力を算定する標準の規定として面白いものを紹介すれば

勞働力

男	十八歲—六十歲	一、〇〇
	十六歲—十八歲	〇、七五
	十二歲—十六歲	〇、五〇
女	十八歲—五十歲	〇、八〇
	十六歲—十八歲	〇、六〇
	十二歲—十六歲	〇、五〇

勞働不能者

男十二歲已下	六十歲已上
女十二歲已下	五十歲已上

心身の不具疾病に依る勞働不能者は別に定む

この法律中特に注目すべき重要なる規定を擧ぐれば、第一豐作によつて得る過剩收入並に販賣市場に便利なる地位より得る過剩收入は、悉く政府に徵收して公共の用に供すること。第二農具及び種子の賣買は政府獨占すること。第三農產物の內國及び外國取引は國家の獨占とすること。第四土地の使用權は他人に讓渡することを得ず。又如何なる事情に於いても購買租借、贈與、相續、その他の契約に依つて之を取得するを得ざること等である。

「この新土地制度は忽ち農業荒廢——農產物の激減と農民の不平——政府に對する反抗運動とを惹き起した。元來農民は土地に對する愛着心が強いものであるのに、新制度は個人の土地所有權を絕對に認めない。そして折角耕して得た收穫の餘剩は、悉く公共用として政府に徵收せられて了ふのである。從つて農民は悉く懶惰になつて、自家の糊口に必要なる收穫を得る程度に耕作することゝなつた。偶過剩の收穫を得た者は、之れを隱匿することが一般の風をなすに到つた。從つて農地は荒れ、穀物は減少して由々しき食糧問題を生ずると

同時に、他の一面に於いては土地所有の觀念の强烈なる農民は、自已の耕作する土地が自己の所有に歸し、其收穫が悉く自己の所得とし、農產物の賣買も國家の獨占とせず、農民等の自由處分に任さんことを主張して政府に肉薄するに到つた。その外土地の分配に不平を抱く者は、再分配を要求し、反革命派は此機會に乘じて之等の農民と結托し、あはよくば現政府を顚覆せんと暗中に活躍した。

「茲に於いてソウエート政府は所謂新經濟政策なるものを宣言して、昨年初秋以來着々その土地の社會共有主義を緩和する法令を發布するに至つた。先づ第一に農民各自の收穫に對して單一現物稅を徵收するの外、他の過剩收穫は悉く農民の所得として自由處分を許した（一九二二年三月命令）。又農民に對して自作し得る面積の土地の占有及び使用權を永久に認むることゝなつた（一九二二年三月土地自作法、同十月土地法）。そして土地の賣買讓渡は之を從前通り禁止するも、一定の條件の下に貸借することを許可し、又勞働者の利己的使役は之を嚴禁するに拘はらず、己を得ざる事情に依つて農耕期を逸するが如き場合には、耕作の補助として勞働者を傭ひ入るゝことをも認可するに至つた……この土地永久使用權を認めたことに就いて、私がモスコー滯在中當局者に質した所、政府は決して土地の社會共有主義を拋棄したものではない。個人の土地所有權は主義上にも將又法律上にも決して之を承認してゐない。たゞソウエート政府の主義を理解し得ざる農民が、濫りに暴動せんことを虞れて、一時鎭定策として占有及び使用權を認めたまでのことである。從つて今後時機を見て政府は再びその權利を回收する意嚮であると物語つてゐた。併し實際問題として農民は全部之に依つて土地を貰つたものだと信じてゐる。そして既に農民の間にはそろ〳〵小さいブルジョアが出來てゐる。從つて將來農民の大反抗なしに、この土地の權利を政府に回收することは、到底不可能であると私は斷案を下すに躊躇しないものである。」

已上の說明に依つて勞農露國の農業狀態を知ることが出來る。即ち勞農露國は國民の絕對多數である農業を立國の大本としなければならぬこと、土地の

社會共有を實現し勞農者にそれを分配したこと、農民の過剩收入を徵發したり土地の私有を許さなかつたことが農民の反抗となり、新經濟政策を樹立しなければならなかつたこと、これに依つて土地の私有が許され小さいブルジョアが出來たこと、幷びにこの私有制を再び共有制に復することは困難であらうと云ふ意見とに盡きてゐるのである。農業立國であるにも拘らず、露西亞の農業は決して振興してゐないことは事實である。商工資本主義の後を繼ぎ勞農生產主義を樹立しようとするのであるから、その困難が並大抵でないことは推察しなければならぬ。特に國際的に商工主義の潮流が澎湃してゐるのに、獨り經濟上の孤立に依てこの難局を打開しなければならぬ。恰も大洋の眞中に眞清水の泉を掘らうとする困難がある。試驗管中に置かれてゐると云ふのは全くこの爲めである。

元來露西亞の農業狀態は革命前に於いても土地こそ廣漠であれ、その收益は必ずしも豐富なものではなかつた。カウツキーはマッスロフに依つて次の事實を記載してゐる。露西亞の農民が各自平均借地してゐた土地は西歐の農民よりは遙に廣かつた。革命前五ヘクター（我が五町餘）已下と云ふのは全農民の一割餘一〇、六パーセントであつたが佛蘭西では七一、四パーセントであり獨逸では實に七六、五パーセントである。然し彼等の無智や農具の不備や家畜や肥料の欠乏の爲めに收穫の率は西歐諸國の遙かに下にある。佛蘭西では一ヘクターの土地から小麥が七〇、五ブット（一ブッドは一六、三八キログラムで我が四貫三百五十七匁）收穫され獨逸では七七ブッドであるのに露西亞では二八、二ブッドに過ぎない。即ち一ヘクター當り露西亞の收穫は獨逸のそれに比し殆んど三分の一に過ぎぬ。農具の欠乏や農耕に付いて無智な爲めに、かうした不成績にあると考へられてゐるが、かゝる農業を基礎として勞農立國を策するのは不利であるに相違ない。この不利を冒して尙能く勞農國として成立することが出來るならば、世界の多くの國に於いて、農業立國が必ずしも不可能のことでない證據ともなるであらう。我國は土地こそ狹少であり、傾斜地が多

いので大農に適しないのであるが、集約法の發達に於いて、悠に露西亞の數倍を收穫することが出來る瑞穗の國である。

川上氏と同じやうにカウツキーも亦勞農露國の將來を悲觀して居る者であり、且つ勞働者の獨裁、幷びに民主的合議制に關して激いレニンの論敵である。彼は勞農露西亞に於いて土地の共有が實行されなかつたことに對し論詰してゐる。彼に依ると現在露西亞の基礎になつてゐるものは農業である。それも小農民の農業である。住民の五分の四若しくは六分の五はそれに依つて生活してゐる。一九一三年に於ける都市の人口は二千四百萬で、村落のそれは一億四千七百萬であつた。村落の大多數はもとより農民である。革命の後にもこの關係は少しも變つてはゐない。多數の工場勞働者が歸農したので、最近寧ろ激しくなつてゐる。食糧の欠乏は村落よりも遙かに甚だしかつたのである。……一八六三年から一八九二年までの三十年間に、歐羅巴露西亞の耕地は、次のやうに賣買されてゐる。

	買はれたる價	賣られたる價
貴族に依つて	八億三千百萬留	十四億五千九百萬留
商人に依つて	三億一千八百留	一億三千五百留
農民に依つて	三億三千五百留	九千三百留

貴族の土地が減り、都會の中流商人に比すると農民の所有は增加してゐる。然し農村の人口はこれ以上に增加したので、一人の平均所有は却つて減じてゐる。村の共有地があつて、土地の使用を調節してゐたが、經濟上の變動の爲めに次第に消滅して、耕地の配分が非常に不平等になつた。あるものは富みあるものは甚だしく貧乏になつた。然し兩方共に大地主の土地を羨み、これが轉覆するのを熱望してゐた。こんな關係で彼等は革命的になつてゐたが、この希望は都會に於ける一部の知識階級に依つて發表されてゐた。土地の所有に對して一大變革を與へることは、當時の專制政治を取り除くのと同じ程度に重要であ

つた。一九〇五年の變動の際、特にこれが農民の心にはつきり考へられるやうになつた。それ已來農民は社會運動者と密接に提携することになつた。かくて現在のソヴイエト組織は、工場勞働者の組織であると共に實に農民の組織であるとしてゐる。[5] 歴史的の關係もあるが、露國の農民のやうに土地の爲めに苦しみ、從つて土地を翹望した處も稀である。この希望を滿足させなければ、新政府の成功は殆んど絶望であつたのも無理はないのである。

カウツキーは更に云つてゐる。一九一七年の變動後個人が大地面を所有することは出來なくなつた。この地面が何う處理されるかに付いては、樣々の考があつた。最も穩當なのはこの大地面を國有にして、農民に共働耕作をさせると云ふことであつた。これには賃金勞働者として働いて來た多數の農民がなくてはならぬ。處がこれまでの露西亞にはさうした階級はなかつた。從つてこれを實現することは出來ない。他の案はこの土地を同じく國有にし、土地をほしがつてゐる農民に分けて貸し付けることであつた。然し農民はこれを私有しようとした。そしてこれには誰も爭ふことが出來なかつた。[6] かくてこゝに殆んど私有制度と目すべき狀態が成立したのである。處が生産が私有として行はれ、生産者の必要額を取り去つた殘りが租稅として取らるゝならば、卽ち收穫の過剩が徵收されるならば、生産者は最少限しか作らないのが當然である。支那の如き專制治下に於いて農業が荒廢したのはこの理由である。稅吏が一度顯はるゝや農民の剩餘は悉く奪い去らるゝからである。露西亞はこれと同じ運命に遭遇したのである。然し露西亞のやうな人口及び面積の下で土地を分有しながら、農民を繁榮させて行かうと云ふのは出來ない相談である。現在よりも遙かに高等な農具が得られるならばそれは出來るかも知れない。然しそれには全農民の教育を一般的に高めなければならず、牛馬の數も增加させねばならず、機具幷びに肥料には一大改良が加へられねばならぬ。小農を實行しながらこれを實現することは到底不可能であるとカウツキーは云つてゐる。事實大農生産は科學及び機械の應用に待つべきであり、著しき勞働の分業に伴

はなければならぬのであるが、今の露西亞に向つてこれを求むることはもとより困難であるとしなければならぬ。[7]

土地の所有は實行されず、大農法が實行されないとするならば、自然土地の私有を永續さすより外はない。更にカウツキーは云つてゐる。[8] 小農は土地を小さく區劃し、これに對する計劃を立てることになるから、勢私有制度を助成することになる。歐羅巴もさうであり、亞米利加もさうであり、世界到る處この傾向を繰返してゐる。露西亞のみがこの例外たることは出來ぬ。かくて現在露西亞の農業の基礎に於いて、新經濟制度（社會主義制度）が建設され得ると誰が信じ得るであらうか。……現在最も貧しい露西亞の農民でも、私有制度の原則を拋棄しようとはしてゐない。共働的な生產に依つて難境を切り拔けやうとはせず、たゞ土地の分配額を增やして、富有になつて行きたいと望んでゐる。即ち私有財產の增加に依つて運命を開拓したいと望んでゐる。土地に對する渴望が今や最も强く私有制度を擁護してゐるのであると。兎に角露西亞農民の土地所有慾からしても、一時行はれやうとした共產制度が却つて撤廢されなければならなくなつた事實よりしても、川上氏の意見のやうに、「將來農民の大反抗なしに、この土地の權利を政府に回收することは到底不可能である。」と一應斷定することが出來るであらう。然しこの斷定が明瞭な事實であるならば何も勞農露西亞を試驗管中の者であるとする必要はない。寧ろ勞農立國に依つて一國を禍難の中に投じ終つたとすることが出來るであらう。然し事實は決してそんなに單純ではない。かうした虞れは勞農政府當局も懷き、これに對しては或は資本化し、或は軍國化し、この理想を實現し樣としてゐるのである。勞農主義に立脚せんとする勞農露西亞が、農村の研究に取つて特に興味あるのはこの點である。

(1) 横井時敬氏　日本百科大辭典「農業」
(2) 本書　第一編第一章
(3) 川上俊彦氏　勞農露國　八一頁
(4) Massloff. Russian agrarian question.
(5) Kautsky, The dictatorship of the proletariat. p. 103.
(6) Kautsky. ibid.
(7) Pasvolsky, The economics of communism. P. II. Chap. 5. 參照
(8) Kautsky, ibid. p. 115.

第三章　農業立國の提案（二）

農業立國の政策を新しく實現せんとする努力に對する弱點と難點とは、實に上のやうである。然し又他の半面をも知らなければならぬ。勞農政府の中心であつたレニンは、農業課稅に關する說明に於いて、これらの難點を見とめると共に、又その對策をも考へてゐる。[1] 農業や鑛山や森林やその他色々の企業があるにしても、今や機械も食物も運輸機關も充分にないので、これらを完全に發達さすことは出來ぬ。從つて私有を要求する運動が有力になり、結果農業の荒廢となつたり、その生產力を濫費することになつたり、遂にはソヴイエット政府を信じなくなつたり、最も恐るべきは投機熱を誘ふに到るであらうとし、これが對策を考へてゐる。レニンに依れば今の露西亞に存在する社會經濟的な層を五

つに分けて考へることが出來る。一、原始的な農民生産　二、小額な商品生産、穀物を賣ることの出來る農民の大部はこれである。三、私的資本主義　四、國家資本主義　五、社會主義である。勞農政府として戰はねばならぬ階級は、二に相當する小さいブルジョアである。川上氏も今や農民の間には小さいブルジョアが出來てゐるとしてゐるが、レニンも亦これを認め、これが對策として農業課稅が企てられてゐるのである。從て此間の爭鬪が何う展開して行くかは、もとより試驗管中のことに屬する。必ずしも早計な斷案には到着されないであらう。

更に產業の統一に關しレニンは地方幷びに村落に行はれてゐる產業を所有することが、眞面目な勞働者の目的でなくてはならぬ。たとひどれだけ小規模の產業であつても見逃せないのである。國家の經濟政策はこのことに集中されなければならぬ。地方產業の發展が大規模產業を建設する確實な基礎であり、實に着實な一歩であるとし、又農業の將來に關しては電化の必要を提唱してゐる。露西亞の經濟的な安定はたゞ一つの條件の下に於いて得られる。それは農業の電化である。然しこの條件は少くとも數十年を要するであらう。たゞ英吉利、獨逸及び亞米利加の如き國に於いて、無產者の勢力著しく增大するならば、この年限を短縮することが出來るであらうとし、且つ最も望ましい政策は農民の欲しがる工場の產物を彼等に與へ、穀物や其他の材料と交換することである。今これに着手してゐるが、あらゆる必要品を悉く提供することは困難である。少くともそれには長い時日を要する。これは田園の電化が完成しなければ實現されないのであるとも云つてゐる。工場の統一、農村電化、幷びに農產物工業品との交換が如何に完全に行はれて行くか。それは問題であるが、彼等の主眼とする處がこの點にあることを注意すれば足りる。

同じ問題に對して勞農政府の硬派中の硬派と目せられてゐるブハーリンの云ふ所は更に精密であり、革命後の動搖をもつと具體的に說明してゐる。新しき制度の樹立に於いて農民が如何に重きをなすか。又農民の自覺が如何に進歩して來たか。變動期に於ける農村と都會の關係が何んなに維持されて行か

ねばならなかつたか。そして今後の對策が何うなり行かなければならぬか。始め露西亞では土地の八二パーセントが大地主に所有されてゐた。それが農民に與へられることになつた。農民は土地をしつかり握つてゐるのが一番大事だと考へた。兎に角土地からは食糧が取れるから。土地分配後過剰收穫が悉く徵收されることになつたが、これは農民の苦痛とする處であつた。これに對してブハーリンは率直に云つてゐる。若し政府が農產物の剩餘を悉く取り上げるならば、それは生產の率を高める剩餘を全く取り去ることになる。生產の剩餘を悉く取り去られると云ふことになれば、農夫は自分で要る丈けのものを作つて、餘分を作らないことになる。尤も彼等は餘分のものを作つて、地主に對して自分らを擁護してゐる都會勞働者を養つて行かねばならぬと云ふのは重要な刺戟であつた。然し內亂が鎭定して彼等の地位が安全になると、この刺戟はも早や効を奏しないことになる。從つて耕地の面積は減少して、都會は食糧欠乏の危險に頻した。かやうな狀態は當然都會の產業に影響した。機械工業

が全く崩壞すると云ふことはないが、都市は饑餓に面接しなければならぬ。大工業に從事してゐる勞働者は、各自にその活路を見出さねばならぬ。彼等は自分の工場で小さい物品を製造しては其を賣りに行く。かうしてゐる間に、工業勞働者の階級は殆んど分解して小商人となり、自ら小製造家と考へ、小資本家として考へるやうになり、更に職人として村落へ働きに歸るやうになる。こんな風で有力な工業勞働階級は殆んど薄弱なものになつて了ふ。のみならず國家の機關として、工場勞働者の最も優秀なものを送つてあらゆる村落の統治をさせねばならぬ必要に迫られて來る。農村に新政を敷くには、卽ち農村を導く爲めには必ず工場勞働者を送らなければならぬ。この爲めに都會の工場が如何に苦しむかは實に想像に餘る。工場にはたゞ拙劣な職工しか殘つてゐなかつたのである。これは慥かに勞働階級の內部に於ける危機であつた。これと共に農民も亦苦んだのであるが、その程度は遙かに輕かつた。經濟的な立場からするならば、かやうな變動に於いて最も利益を得たのは農民であつた。農民は

始めて自分の力を信ずることが出來た。のみならず彼等は軍隊に於いて立派な訓練を受け戰爭から歸つた時には全く別人のやうであつた。云はゞ彼等は從軍前に比するならば、知識よりしても道德よりしても高い基準に到着してゐた。そして已前と違つて政治の意味を遙かによく了解してゐた。「俺達が國家の主力なのだ。子供扱ひをするものは誰でも容赦しないのだぞ。俺達は無論都會の勞働者達を養ふ、俺達が兄分なのだ。だからそれ相當に俺達の權利を要求するんだ」と云ふ自覺に立つてゐた[4]と。かうした關係に於いて、農業が工業よりももつと重要な地位を占むることになつた。都會の勞働者に對して兄分であることを自覺するに至つたこと、そして農民の後援を離れて、何う云ふ政治も出來なくなつた處に、眞の農業立國の根柢が築かれたと云ふべきである。農は國の大本なりと云ふやうな空虛な宣言に依つて、農業立國の實が確定するものではない。かくして立國の基礎になつた農民は如何なる要求と如何なる進路を取るに到つたか。

更にブハーリンは云つてゐる。戰爭が終ると直ぐに農民はその要求を提供した。彼は小商業を目錄んで經濟上の社會主義的施設に反對した。彼等は多く共產黨に反對して、ボルシエヴイキへと云ふ標語の下に行動した。ボルシエヴイキは寧ろ資本的な團體と思はれてゐた。ボルシエヴイキは農民に何ものをも與へたが、それかと云つて何事の要求をも持ち出さなかつたのであると。[5]政治は農民の要求を主として行動しなければならなかつたのである。かうした必要の爲めに新經濟政策が實現することになつたのである。

かゝる必然に迫らて建設された農民の私有制度が何う云ふ運命を持つかに關し、ブハアリンはレニンと同じやうに機械工業の完成と、農村電化の實現に依つて、再び共有制を行ふことが出來ると信じてゐる。彼は云つてゐる政府に取つて食糧は何よりも大切である。若し食糧に窮するならば、都會勞働者は自分の組織した政府にも反對するであらう。共產制が成熟するのには一定の時間を要する。やがて政府は機械工業を完全させ、殊に露西亞の電化を實現するで

あらう。電化が成就するならば、農民は恐らく電力を政府に求むるに到るであらう。その時彼等は社會公有的な機能を了解し、所有の本能を激昂させないであらうと。機械工業の完成と農村電化、勞農露國の謎を解くものはこの鍵である。然しこれが何うして實現されて行くであらうか。それは恐らく困難中の困難であると云ふことは出來る。然しこれを絶對不可能とすることは出來ない。而も國際關係はたゞず變轉して行く。今日の友は必しも明日の友でないかうした世界的大勢の潮流に乘じ、且又世界的な商工業不安の傾向に擁せられて、農業立國が何うした幸運を得るか。又逆運に逢着するか。悉くそれは未來に屬する。早計なる斷定を避けて、世界的經濟的關係の機微な指標を凝視しなければならぬであらう。たゞ一言これに加ふべきことは、如何なる妥協案が勞農主義の上に築かれるにしても、それが勞農を立國の大本とする限り、決して大なる累進的利潤の商工生産を許さないことである。そしてそのことのみは今の勞農國に於いて確かに保留されてゐることを注意しなければならぬ。累進的利潤は、實に農業と氷炭相容れない生産方法だからである。

終りに臨んで勞農露國の農業對工業の關係として、現在逢着してゐるハサミ問題に言及しなければならぬ。これはトロツキーが農業と工業との離反を指摘した言葉である。ハサミ問題とは農業と工業とをハサミの兩片に譬へたのであつて、「現在勞農露國では農産品は非常なる暴落を告げ、その價格は千九百十三年の價格に比較すれば四十七％方の下落を示してゐる。然るに一方工業製産品の價格は、之を千九百十三年の價格に比すれば、約二百％乃至三百七十％方の昂騰を示してゐる。斯くてハサミの兩片は全く相反する方向に開いて終つたのである。この開きを如何にして合はするかと云ふのが要するにこのハサミ問題である。」[6] かう云ふことになつた原因として、工場が自分の利益を上げることに急であつたことや、工業品の課税が高率であつたことや、農産物の輸出が思ふやうに行かなかつたことなどが擧げられてゐる。直接な原因としてかう云ふことも數へられるであらう。「一方ではトラスト化されシンヂケート化

された國有工業や、銀行や、勞働組合や、勞働者は、八時間勞働を享樂し、そしてその生活狀態は多くの物質及び文化の點に於いて、日々に進歩し、そして他の一方では貧しい農民はツアリズムに基く無智と痲醉とを受けつぎ、その父祖傳來の原始的方法を以つて働き、その仕上げた仕事に對してほんの當てがひ扶持を受けてゐる。」[7] 簡單に云へば、都市の工業は近代機械生産の方法に依つて運用されるに、農業は尙中世的な生産方法に依つて維持されてゐると云ふことに歸する。これも亦その原因として擧げることが出來るであらう。

然しかうした原因の最も根本的なものは、累進的生産の工業と、そうでない農業との相違から來るものであり、換言するならば勞農立國を主調としながら、農本主義の生産組織が完成せず、帝政時代の遺産なる商工業と、國際的な資本主義の影響との爲めにかうした破綻が起つてゐるものと考へられる。從つてハサミ問題は農工業の分離ではなく、中世的生産方法に依る農業と近代機械工業との離反であつて、農業そのものの工業そのものゝ離背でないことは明かである。

商工業立國の處では現在それの經濟原理に依つて農業を支配してゐる。然し露西亞は今農業經濟原理に依つて商工業を支配するに到らないのである。そして商工生産主義の下に養成せられ、而も勞農立國の基礎を建設しなければならぬ勞農幹部の頭腦に、このことが了解されてゐるか、何うか、それは甚だ疑はしい。海岸に住み馴れた魚が清水の河川に移住し、そこで生活の新樣式を發見しなければならぬ狀態である。海洋のみに行はれる理法を以つて時々河川の事實を强制しようとする。レニンの所謂工場統一、農村の電化などの理想の中には資本的經營の要素が多量に含まれてゐるのではないか。工場統一、農村電そのことは正しい道であり、進まなければならぬ前途である。然しそれらのことが眞の勞農立國の上から考へられてゐるのか。又は知らず識らず商工中心の影に左右されてゐるのではないか。幻影はさめる日にはさめる。然しそれが後れば後れる丈け危險と疲弊とに面接しなければならぬ。

農業と工業とはその性質として必ずしも背馳するものではない。累進利潤

を要求する近代工業と背馳するのみである。衡平な立場に於いて二つの提携を望むことは決して不可能ではない。上に農工商鼎立の理想が行はれないのを指摘したのは、商工の累進利潤を現在のまゝに許し、そして寧ろ漸減的生産とさへ云はれてゐる農業との鼎立を主張しようとするのを誤謬であるとするものである。農工各の内部に非人道的な要素を含んでゐないならば、兩者は寧ろ提携すべきである。「田園工場及び職場」の著者は少し已前までの農業工業の提携が完全であることを述べてゐる。「農業と工業とは少し已前には完全に提携してゐたのである。その當時村落は種々の工業を持ち、市中にある技術家も農業に親んだので、都市は一つの工業的村落であつた。中世都市の美術工業は、富裕な階級の需要を充すものであつたが、農村の製品は數百萬の民衆の需要に應じたものであつた。この現象は今でも露西亞や佛蘭西や獨乙に殘つてゐる。」と云ひ又「人々は自分の消費するものを自分で生産しなければならぬと云ふことから、又は健康の爲めから、新鮮な空氣と手工勞働に依つて生活しようとすることから、必ず農業と工業とが結び付けられねばならぬであらう」とし、そしてこのことが決して機械の發明されなかつた已前に歸るのではない、機械を正しき生産に利用すべきであるとしてゐる。「工業と農業と提携させる爲めに、手工時代に後戻りすべきものだと思ふのは間違ひで、人間の勞力が機械で省略される以上は、充分これに依頼し利用すべきである」としてゐる。かうした機械力の利用は、トルストイの思想に於いても見られる。機械工業そのものが惡いのではない。これを利用して累進的利潤を要求し、累進的でない農業を壓倒しようとすることが惡いのである。若し試驗管中の露西亞が機械工業の遺産を繼承すると共に、この累進的利潤の法を採用するならば、それの破綻は豫め期待することが出來る。累進的利潤を切り離して、機械工業を發展さすことに於いて、始めて農本主義の理想が實現するであらう。記して以つて今後の展開を見ようと思ふ。

(1) Lenin, The meaning of the agricultural tax. (The new policies of Soviet Russia.)
(2) Lenin, ibid.
(3) Lenin, ibid.
(4) Bukharin, A lecture to the delegates of the third World congress of the comintern in Moscow on the significance of the new economic policy of soviet Russia. (The new Policies of Soviet Russia)
(5) Bukharin, ibid.
(6) 玉置房一氏　赤裸の赤露　一九三頁
(7) 現在ロシア經濟の主要問題（マルクス主義　第一卷第一號）

第四章　農村對策

農業立國の提案は、我等が乘る車を北斗星に繫がうとするものであるかのやうである。疲弊した農村の現狀からして、かう云ふ優越な地位を商工業の上に見出して行かうとするのは、夢中更に夢を說く觀があるかも知れない。然しあらゆる生產を支配してゐる商工業が、內面に於いて癒し難き疾患を發生させて居り、生活の不安が一般的に高まりつゝあるのに、農業が生存の必需品である食糧を生產してゐると云ふ根據よりして、自然農業の新しき理想が建設されなければならぬ使命が與へられてゐる。農村振興を期するならば、如何なる犧牲を拂つても、農業生產の原則に準じて商工業を統制して行かなければならぬ。若し農村にこの自覺とこの理想とがないならば、農村は疲弊に疲弊を重ねるのみ

ならず、遂に山野を悉く荒蕪させ、全社會を擧げて衰亡の非運に投ずるであらう農民の運動は如何なる手段に依り、又如何なる政策に依つて進行し得るとも、それらはすべて理想實現の政策に過ぎないものであつて、究極の目的とする處は農業生産の經濟組織に依つて、商工業生産を統制することにあるとしなければならぬ。

農村對策なるものが官僚、政黨、學者、實業家に依つて唱導されてゐる。言葉の詮議をするやうであるが、農村對策なる標語は、農村に對して親密な感じを呼び起さぬ。それは農民ではない政治家、學者、商工業の代表者が、職業的にそれを詮議するものであつて、農民自ら自分の問題として、自ら解決しようとしてゐる氣分が顯はれてゐないからである。商工業經濟の代表者から云へば農村を向ふに廻しての對策であらう。然し農民自らとしては、農村の建設であり、農村政策であつて、却つて商工業を向ふに廻はす對策を考へ都市を向ふに廻はす都市對策を講ずべきである。農民の問題は農民自らが解決しなければならぬ。これ程人口に膾炙して、而もこれ程自覺されない標語はない。上來考へ來たれる農村對都市の抗爭を明瞭に意識した上に於いて、何う云ふ妥協もなく、徹底的に農民の問題は農民自ら解決しなければならぬと云ふ自覺に立つべきである。

農業對策として商工代表者に依つて記述されてゐる成案は、農業自身に取つては悉く天降りの案である。何れも何かの取りねは持つであらうけれども、眞に農民を解放するものではない。德川時代の農民對策であつた「生きぬやうに枯れぬやうに」の案に過ぎない。一例を米價維持策なる所謂農村對策に付いて考へて見る。河田嗣郎氏は「農村問題と對策」に於いてこの問題を次のやうに云つてゐる。[1]「生産者としての農家の利益だけから之を謂へば、固よりそが彌が上にも高價で、生産費の照合採算上多大の企業利潤を産み出すに足る程度の價格たるを以つて、最も有利とするわけだけれど、然し農家とても生活の必需品たる食糧品の生産を主とする限り、一般消費者の利害を無視する譯には行かぬから、農産物の價格は、つまり生産費を回收して、それ以上に正當的なる利

潤を生み得る程度に於ける正當的價格たるを以つて滿足する外なく、其程度に於いて價格の安定せんことが、農家として實際上望ましい處で、又その程度の價格ならば農家が正當に社會に向つて之を要請し得る處なりとする」と。これは甚た尤もなやうで、實は商工業經濟の上から、農業を支配せんとするものゝ代辯に過ぎない。と云ふのは「生活の必需品たる食料品の生産を主とする限り一般消費者の利害を無視するわけに行かぬ」と云ふ思想に根據がある。必需品たるが故に一般の消費者の利害を無視するわけには行かぬと云ふことの半面には、たとひ論理的にではないが、事實に於いて「必需品でない贅澤品を生産するものは、一般消費者の利害を無視してもいゝ」と云ふ他の原則が含まれてゐる。累進利潤に依つて商工業が莫大の富を集中し、經濟的に農業を壓迫し盡してゐる根據は實にそれらが贅澤品を生産するからである。富が一定の度に集積された處では、贅澤品は社會的な心理的な虚榮や、快感や、性慾的な裝飾やの本能を徴發して、[2]累進的な高價を維持することが出來る。そしてこれが如何に高價を維持するとも、社會的な制裁はない。需用のある限り高價を維持し得ることが、生産者并びに消費者の名譽であり誇りである。かうして集積される富は、壓倒的に必需品たる食料を意のまゝに低廉に引き下げる。食糧の不賣同盟が行はれないのは、今や道德的な又社會的な立場からではなく、全く經濟的に贅澤品生産者と富の競爭が出來ないからである。河田氏は農業者の不賣同盟の効力を認め「農民側の一致團結が相當に堅固に出來さへすれば、其の運動は相當の効果を擧げ得べき見込がある。[3]」と推奬してゐるが、かうした條件附の効果は畫かれたる花の香りに等しい。都市財力の壓迫の下に、かうした團結が出來よう筈もなく、又その効を收めることも出來ないのは、最近の先例に依つて寧ろ明かである。尙氏は農産物の價格安定が農家の希望する處であるとしてゐるが、今の商工生産の經濟よりすれば、必需品は却つて價格が安定しないで寧ろ投機の對象になり易い關係があるとさへ見られてゐる。米價日々の動搖率は木綿よりも甚だしく、生糸よりも更に甚しいのは事實である。

トンプソンは「農産物に對する需要の性質幷びに重要な結果」に關して農産物は彈力性なき商品でありそれは價格が安定せぬものであることを述べてゐる。曰く需要に二種ある。卽ち彈力性のある需要と彈力性なき需要である。貨物に對する需要が價格の變化や購買力の變化に對して敏感に動くならば、それは彈力性のある需要である。卽ち價格が低下しようとすると、需要が直にこれに應じて高まろうとする。又逆に價格が上らうとすると需要が直ちにこれに應じて減少しようとする。價格の動搖に對して需要が敏感に動くのが彈力性ある需要である。これに反して價格の變動に關し敏感でない需要が、彈力性のない需要である。需要の彈力性は價格を安定させ、彈力性のないことが價格を安定させない。普通の狀態ならば彈力性ある需要の對象である貨物が上を向かうとすると、需要はこれに應じて下らうとし、價格の上昇を防ぐ。又それが下らうとするならば、需要が增加し價格の低下を妨げようとする。處が彈力性の需要を持たぬ貨物は、かうした作用がないから甚だしく上つたり下つたりす

經濟學者に依ると主として贅澤品は彈力性のある貨物であり、必需品は彈力性のない貨物である。必需品は一定量まではげしく要求されるが、最少限度を滿たされると、それ已上のものに對してはどうでもいゝと云ふ態度になる。處が贅澤品に對してはそうではない。價格が下つたり購買力が增したりすると、已前買ふことの出來なかつたものまでがそれを買ふことになる。約り需用は廣くなつたり狹くなつたりする。價格の高低に依つて慾望は無制限に動搖する、農業は絕對的に必需品を生產するものであり、農業でない產業は主として贅澤品を生產する。從つて農產物は一般に彈力性のないものであり、農業外の產物は彈力性のあるものである。食糧は比較的彈力性のないことは明かである。從つてこれは價格の安定が得られるものであり常に投機の對象となり得るのであると。(1) かうした關係が存在するならば、農產物は商工業經濟支配の下では、價格は常に動搖するものであるのみならず、必需品なるが故に却つて投機の重要なる對象とさへならなければならぬのである。

農業生産者は最も複雜な能力を豫想しなければならぬ。農耕上の知識のみならず、投機の重要なる對象なる食糧品を賣り出さなければならぬ點に於いて、最も機敏なこの方面の知識さへなければならぬ。而もこれを兼ねるのは最も困難である。かうした逆境に於いて農産物の有利な價格を維持することは、商工業經濟の下に於いては難中の難である。レードラーは云つてゐる。[1] 農夫が最もよく能率を上げようとするならば、彼は熟練な耕作者であり、化學者であり、獸醫であり、機械家で大工であり、書家であり、巧みな買手であり、巧みな賣手であり、立派な監督者でなければならぬことになる。之は實際出來ることではない。多くの農夫はこれらの何れの部門に付いても決して熟練ではない。所謂實行家であり、何もかも混合せる狀態に於いて滿足しなければならぬ。かうして專門的になれないと云ふことが莫大な浪費の根源になる。從つて耕地からの能率を最大限に高めると云ふことは出來ぬ相談である。收穫の後に於いて運送機關の不足や、運賃の高いことや、思惑師や仲買人の利益の爲めに、非常な不利益な立場になる。そして折角の生産物を腐敗さしたり、役に立たずにして了ふ。それかと云つて都會では澤山の貧民が食に饑ゑて苦しんでゐると云ふ次第である。一九一四年の農務省の年報に依ると十万貨車の農産物が、合衆國で廢物になつて了ふことになつてゐると云つてゐるのは、農業が商工經濟の下に如何に苦しまねばならぬかの反證である。この逆境に於いて、何うして農家の要求するやうな産物の價格が維持され、且つその安定が期待され得るであらうか。米價維持並びに安定の如きは、たとひ政治的に幾らかの對策が講ぜられるとも、結果は農民を安らかに眠らすべき、心持ちのいゝ子守歌に過ぎないのである。

自由市場に於いて米價維持並びに安定が出來ないとすれば、國家專賣制は何うであらうか。自由賣買に比してこれが徹底的であることは疑を容れない。

河田氏も「結局は米穀の國家專賣制を實施する外に他に方策はあり得ない[6]」としてゐる。然し國家が專賣するとなれば、國家財力の中心は何處にあるかゞ問題である。例へば政黨の如きが立憲治下に於いては國家の中心勢力たるべ

きであるが、上に見たやうにこれが壓倒的に商工業の代表者で成立してゐるとするならば、專賣價格の決定は必ずしも農民に對して有利には運ばないであらう。設令幾分かの利便は與へられるとするも、結局「枯れぬやうに生きぬやうに」の政策を實現するに過ぎない。高價な食糧品に依つて商工業の生産費を膨張さすならば、商工業の利潤が壓倒的であることは到底出來ないのである。河田氏は「其價格構成に對しては、生産者の利益と消費者の利益とを共に顧慮する處の、社會全体の意志を代表する處の、國家意思が働を及ぼし得るものとする必要がある」としてゐる。これはギルド主義の句調と、絶對國家主義の理念とを一つにしたやうな口吻であるが、かうした國家意思が壓倒的に有勢な商工業主義の下に於いて遂行し得られないこと丈けは首肯されなければならぬであらう。生産組合と消費組合との合意、これが憲政會内閣の下に於いて、政友會内閣の下に於いて、三派聯合の治下に於いて、そして又政友本黨内閣の出現に於いて、又貴族院内閣超然内閣の下に於いて、完全に遂行され得ることであらうか。そ

れが出來ないとなれば、農民に有利なる米穀專賣制の提唱も、亦結局、催眠曲の子守歌に過ぎないのである。

其他の農村對策何れが徹底的に農村を振興さすであらうか。二百三十六年計畫の自作農創定であらうか。自然に滅び行く自作農を温室培養に依つて繁榮させようと云ふことは、北海道にバナヽを熟らせようとするものである。議會に於いて高橋農商務大臣はこの質問に關して、金ばかり與へたとて自作農が出來るか何うかは分からないと卒直に答へてゐる。大局に於いてこの提案はこれに盡きてゐる。公課の輕減も亦農村對策の一つである。たとひ一部の輕減を見るも結構である。然したとひ全部を免ぜられるにしても、農村疲弊の最大な禍根はそれにあるのではない限り、これに依つて直ちに振興するとは考へられない。公課として輕減された農村の餘財は、確かに他の方法に於いて、恐らく他の不合理なる或は濫費の形式に於いて、都市に集中せられるであらう。又この集中の目算が充分に立たなければ、都市の代表者は決してこの案に贊意を

表することはないであらう。亞米利加の南北戰爭に關し、トルストイは、北部が奴隷解放を主張したのは、たゞひこの動産奴隷を解放するとも、新しい別の奴隷が生れて來る可能を自覺してゐたからであるとし、南部がこれに反抗したのは、尙この萠芽のあるを自覺しなかつたからであるとしてゐる。[7] 同じやうに都市が農村の利便を提議するならば、多くは農村の利益が、却つて他の新しい利益を、都市に持ち來たすのを自覺するからであると云ふことが出來るであらう。かうした對策が農村を眞の意味に於いて救ふものでないことは明かである。これも亦農村對策の子守歌である。

農民黨の提唱、これも亦農村對策の一つであらう。上に見たやうに最初の國會に於いて最も優勢であつた農業議員が、今や殆んど微弱な姿に衰へてゐる。金力を背景にする選擧が行はれる限り、農民黨の勢力は殆んど將來をトすることが出來る。衰へて來たものを榮ゑさうとするのは、これも亦溫室培養を繰返すに過ぎない。議會に於いて農民黨の絕對勢力を維持するのは、臺灣からラッコの國產を出さうとするが如きである。農民黨の提唱は普通選擧を前提とし、且つこれが純粹の理想選擧であることを條件としなければならぬ。たゞひ普選が實施されるとも、尙財力競爭の餘地があるならば、農民は到底都市商工家の敵ではない。財力の羈絆から何處までも自由でなければならぬ。尙これに加ふるに、人物の評定は多く都市的敎養、並びに都市的勢力を標準として行はれてゐる。都市的な人物が必ずしも新興農民を代表する人物ではない。農民は農民自らの問題を解決しなければならぬと云ふ標語は、特にこの點に向つて强調されなければならぬのである。

農村對策の中に最も重要であるかのやうであり、且つ農村研究家にしてこれを言はないものゝない對策は、農村の文化的施設の提案である。生活狀態からしても、敎養の程度から云つても、農村は到底都市の比ではない。有意なる青年が農村を離れて都市に入るのは、この欠點があるからであるとして、宜ろしく都市文化の一端を、農村に移入しようと云ふ議論である。表面尤もらしくして、これ

程矛盾と不合理とを含んだ案はないであらう。何となれば文化施設は消費の方面である。現在の文化的施設は都市的消費の上に建設される。都市は都市の生産を基礎として、それの消費とそれの文化とを建設する。然し農村には農村の生産狀態がある。この生産にはこれに相應する消費設備しか出來ないのである。農村に都市の文化を移入することは、利潤少き農村生産の上に、極めて浪費的な都市の消費を提唱するものである。農村は却つて破綻するより他に道はないことになる。農村の中央に田舍劇場と田舍カツフエーとが出來る處には、必ず破産して行く農家がある。そして次いで劇場もカツフエーも頽れて行く。華美な運動服を着てオリンピックの競技を練習しなければならぬ程、農村青年の筋肉は暇ではない。そして又一攫千金の立志傳中の人物が、青年の模範とされたり、勤儉力行、富の把握を人間の生命とする殖産家の模範が、青年に提示されないでもない。然しこれらは都市特有の文化的産物であつて、農村のそれではない。農村は農村自らの問題を解かねばならぬと同じく、農村自らの文化を建設しなければならぬ。都市文化の移入は却つて農村を惡化し、農村を荒廢させ破綻さす。たとひ一時の繁榮を顯はすとも、それは注射に依つて一時を活氣付けるのみである。反動を恐れなければならぬ。農村の文化施設なる對策は、最早や一片の子守歌ではなく、農村の將來を葬り去らんとする挽歌である。自らの能力に依つて運命を開拓しなければならぬ農民は、都市代辯者の子守歌に醉つてゐてはならぬと共に、農村の終末を告げる挽歌を恐れなければならぬ。

農村對策は尙幾らもある。小作爭議調停案もそれであり、耕地國有もそれであり、農業金融機關の設置もそれである。數へ來たれば十指の屈する處ではない。然しその眞相を究明するならば、徹底的に農村を振興し得るものは一つもないのである。「枯れぬやうに生きぬやうに」の政策に過ぎない。若し健全な呼吸の下に、農村が眞の建設力を發揮することが出來るならば、農村は實に眠れるライオンである。都市もこれを恐れなければならぬ。特に最近都市産業は殆んど行詰りの時である。輸入は超過し、日貨は必ずしも世界市場を壓倒する

の力はなく、品質を改良するには生産費を向上させ、且つ商業道德の覺醒に俟たなければならぬ。物質精神の兩面に亙つてのこの二つの要求は、商工業生産界に向つて困難な事情に置かれてゐる。眠れる獅子に跨つて、雷雨の襲來に備へなければならぬ立場にある。たゞ殘る總てのものとして農民は農民自らを解決しなければならぬ運命の日に立つてゐるのである。

(1) 河田嗣郎氏　農村問題と對策　五二頁

(2) W. Sombart, Luxus und Kapitalisums. S. 73.

(3) 河田嗣郎氏　同書

(4) J. G. Tompson, The nature of demand for agricultural products and some important consequences. (Journal of political economy. Feb. 1916.)

(5) Laidler, Socialism in thought and action. P. 16.

(6) 河田嗣郎氏　同書

(7) Tolstoy, The slavery of our times. P. 69.

第六章　農村の進路

農村對策は何れも一つの政策である。政策は對症療法である。それが必要な點に於いて必要であり、必要な間丈け必要である。これを利用しこれを拋棄する最後の指針は、農業立國の理想に俟たねばならぬ。この理想を實現するに有効なるものは、有効な限り利用すべきであり、その時と度とを失ふならば、何時でもこれを棄てるべきである。農村は誰れの手段になつてはならぬ。然し與へられたあらゆる手段を賢しく使用して行かねばならぬ。一時の手段だからとてこれを捨てゝはならぬ。又一時の手段に膠着してもならぬ。車に乗れば足が弱るからと云ふ理由に依つて、汽車に乗らないのは愚である。然し乗ることにのみなれて、自ら立つて歩むことを忘れるのは惰落である。利用して捉まず、馴れて自分の本領を失はざる處に、實行運動としての樞機がある。この意味に於いて農村對策の各は、それらが他日農業立國を完成さすの階級たるべきものであるならば、これを利用するのを忘れてはならぬ。自作農が成立するならばそれも結構である。農民黨が出來るならば、たとひ少數であらうともそれは結構である。ある大なる建設に到る準備として利用される限り利用すべきである。公課負擔の減少が實行されるならば、これを利用して農村は新しき生産の組織に、この餘財を使はなければならぬ。

蓋し農業立國は我が大古立國の精神に歸るものであると云ふとも出來る。王政復古が政治の復古であるやうに、農業立國は經濟の復古である。祖宗の偉業に歸へることである。たゞ幸にして現代は科學と機械力とが完全に發達したのである。この生産關係を利用するに、農業建國の精神に依つて、大局を決めると云ふに過ぎない。祖宗の偉業に歸へることは、痴人の夢の樣であるかも知れない。然し政治の王政復古が內外の事情の爲めに容易に實現し得た事實に

依るも、內外の經濟的事情よりして、經濟的復古が、必ずしも難事であるとすることは出來ぬ狀勢に立ち至つてゐる。古の聖王は農業をこそ尊べ、累進利潤の不合理な商工政策は、夢にだも考へなかつた處であらう。人性の自然に順應し、道義の大本に立脚する組織のみが、能く天下の大衆を統理するであらう。

農政本論の著者は我國の農業立國を論じ、その推移を次の樣に述べてゐる。[1]

皇國上代の古例を按するに、皇太子諸皇子を始として太政大臣より少初位の下官に至る迄、皆鍬を賜ふとあり…故に上代は皇朝甚だ隆盛にして、海外諸蕃の歸化すること更に虛年あることなし。然るに中葉に至るに及びて、農政愈衰微し貴人は貴戚に傲りて鍬を執ることをはぢて、百姓を敎導して農業を講習することなく、武事も亦貴人は劔戟を執りて身體を勞働し、危に臨むことを憚りて此れを勸むる事を厭ふ。唯日夜金殿玉樓に坐し、美服を衣て美食を嚙ひ、美酒を飲み或は俳優僚友と會して、詩歌管絃を事とし、或は淑女艷婦を集めて淸歌妙舞を樂しみ、且陽成天皇の莊園を立てられて以後は、世上の奢侈愈甚しく、皇家の租稅年々に減じ、府庫倉漸々空虛すと雖も、華費の超過すること愈募り、財用の給らざるに至り、頻に橫歛を誅求すること重なるに由りて、百姓皆困窮に迫り…。總て是れ…大臣等、其の身の勞勤することを畏れ憚りて、農政を勉强せざるより起原せり。故に人身の禍は上下の論なく勞勤を憚るより大なるはなし。

史實の細事は別の問題とするも、太古農業が非常の重きをなし、支配の任にあたるものも亦農耕の勤を營んだことを推定することが出來る。たゞ中葉より勞働を厭ひ、奢侈と贅澤とを事としたことが、農本主義に大なる動搖を與へたと考へられる。尤も奢侈贅澤になつて農耕の勞働が輕視されるに到つたか、農耕生產の過剩集積が一部の人々の奢侈を助長せしむるに到つたか、それは今闡明つて歷史に顯はれてゐると云ふ事實を指摘すれば足りる。

この事は今あらゆる人々が考へてゐるよりも、恐らくもつと重要な意味を持つと思ふ。そは農業立國は一度榮えて衰へたのである。かりに商工立國に對して再び新しき農業立國を策するとも、この歷史は繰返されるのではなからう

かと云ふ問題が隱されてゐるからである。これは非常に重大である。勞農露西亞が今苦しみつゝある問題も畢竟これに過ぎないと考へられる。勞農露西亞の資本化、これが露國に取つて最も恐ろしい惡夢である。この問題を簡單に解くことは決して今可能ではない。然しこれらの史實よりして、贅澤と云ふものが少くとも農業立國に向つては、恐るべき敵であると云ふこと丈けは云はれ得るであらう。幕末に於ける農村の疲弊と商工業の活躍との間にも、一般的な贅澤と云ふ隨伴現象を認めることが出來る。殊に農民自身が贅澤になつてゐる。それは憐れむべき程度の贅澤に過ぎない。然し六公四民の狀態に置かれた農民としては、出來る丈けの贅澤であつたであらう。それが農本主義を崩壞させる重要な原因であつたと考へられる。

關東御入國遊され候節は、鄕村の百姓共の儀は目もあてられぬ有樣にて、其所の名主長百姓たりとも家内に床を張りたゝみをしきたる家とては一軒も無之、男女ともに身に布子と申すものを

著し、繩の帶を致し、藁にて髪をたばねたるものばかりの樣に有之候よし……今ときの百姓どもの家居と申候は、大かたは床を張り疊を敷詰め……衣類等の義を男女ともにはれ着不斷不斷着の差別を致し、髪には元結をすき立て、あぶらをぬり申すごとく有之、その村の名主長百姓と呼ばるゝものゝうちには、終に鍬鎌を手に取りたる事の覺えなきと申すごとくなるものもあまた有之候。これひとへに御治世相續きて、御代のもの靜かなるにつれての義なり。[2]

繩の帶を布の帶にしたり、藁の代りに元結を使つたり、常着はれ着の區別が出來たり、床をはり疊を敷いたりしたやうな極めて低い生活要求の滿足でさへ、當時農業生活を脅したのである。これらはもとより憐れむべき贅澤である。今よりするならば贅澤と呼ぶことさへ出來ぬ程の最低要求である。それが何うして農本主義に對する脅威になつたのであらうか。トンプソンの云つてゐるやうに、農業は必需品の生産であり商工業は贅澤品の生産である。農民が贅澤品を使用すると云ふことが、商工業の跳躍を許す動機となつたのである。食糧

品が低廉に賣られなければならぬのに、工業品は需用のある限り幾らでも貪ることが出來る。この値開きの爲めに富は都會に集中し、農村は疲弊遂に立つことが出來なくなつた。「破れ家のつゞくり話」はこの間の消息を語つてゐる。[3]

近來の百姓は商人を羨みて農作に力を盡さず、商ひを致す者多くして甚しき害あり。商ひ致す者に制度を立て市中へ出ぬ樣にすべし。村民に商人風うつれば耕作の苦しみを嫌ひ、百姓は引合はぬものなどゝ存じ違ひをいたし、尤も甚だしきは足袋をはき草履を踏きて山畑を耕すに至る。此れ等は小事に非ず、忽せにしがたし。且つ又情愛酒食は勿論なり、婚禮葬式衣服の制度までも却て奢侈に傾きし事は嚴重に申付度きことなり。近來天下の大患たる物價の飛び騰りしは、取り も直さず百姓減じて商人多きが根源に紛れなきことゝ思はるゝなり。政を執るものは、早く心得ありたきことなり……兎角俗に云ふよい農と申すやうなるがあしゝ。市中豪富の者に格式など遣すは武威落つるのみならず、町人の爲にもあしく身分を忘れ破產に至るなり。

農民の離村、農民の贅澤が物價騰貴の現象と併起してゐるのは事實である。

「百姓減じて商人多きが」物價騰貴の直接原因であるか何うかは別の問題とするも、ある經濟階級の崩解と勃興との過度期には、贅澤が著しく發達することは事實である。贅澤は階級不安の一指標である。少くとも崩壞して行く階級は、收入不相應な贅澤に生きること丈けは事實である。細密な關係は別として、若しこゝに移宗の遺風を顯彰し、經濟的復古の氣運を打開し、農業立國を提唱し必需品食糧品の生產を基礎として健全なる物質幷びに精神文化の建設を理想としなければならぬのが、農民の使命であり義務であるとするならば、農民は現在の都市生產になる贅澤品の使用に關して、多大の注意を拂はねばならぬ。そして又都市生產の煽動的廣告に動かされてはならぬ。注意と努力とを以つて物質的な贅澤品を避けねばならぬ。結局贅澤の火は農村を化して焦土とするからである。

ゾンバルトは贅澤の實質を物質快感にありとして、これが發展の主要なる原因となるものは性慾であり、更に名譽心や見ゑ坊や威張りたい本能もこれが因

をなすと考へてゐる。從つて富が集積されたり情愛生活が自由になつたりすると必ず贅澤が勃興するとしてゐる。贅澤品の性質がかうしたものである限り、商工生産の目的とするものがかうした性的な又自己的な衝動を滿足さすものであり、かゝる生産を基礎として成立する社會そのものが、健全なる組織であると許すことは出來ないのである。贅澤品の生産でない點に於いて、農業はこの弊害から自由であり、又かうした不健全な社會生活からも別な進路を歩むことが出來る。「農業立國の根據を築くことは、都市生産の贅澤品に心醉しないことである。農村は何よりも都市的な文化化を恐れねばならぬ。」そして中世并びに祖先が産み出したやうな、土からの藝術、大地からの文化、自然から流れ出づる精神の自覺を根抵として、新らしい人間の郷土を建設しなければならぬ義務を課せられてゐる。

都市生産の贅澤品を排斥すると共に、農村は都市文明の道德并びに思想をも排斥しなければならぬ。立志傳は農民に向つては要なき異境の物語である。英雄崇拜も亦農民に向つては他人の夢物語である。農村の教養に向つて今最も必要であるのは、農村振興の講演に於ける子守歌でもなく、永久農民の現狀に、甘じよと云ふ精神的阿片の宣傳でもない。今最も急を要する農民の教養は正確なる物理學と生理學と殊に日本經濟史の知識にある。就中日本農民史の正確なる知識は、現下の農民運動に向つて最も必要であると考へられる。これらは在來のものゝ間に合せの歴史であつてはならぬ。農民巳外又は農民を知らぬものゝ、勝手に組み建てた歴史であつてはならぬ。農民自らの自覺史であり農民を理解するものゝ組織せる歴史でなければならぬ。農民教化に於いてこの重要事が何よりも閑却されてゐることは恨事中の恨事である。

終りに臨んで農民運動は今何に向つて進むべきか。これは重大である。地主と小作との爭議は尚續くであらう。利害を異にするこの二つの階級は、更に激しく繰り返されるかも知れない。小作爭議調停案も根本的にこれを解決するものでないことは明かである。この問題に關して云はれ得る唯一のことは

地主は進んで自作農となつて農耕に從事し、都市商工企業者の如き遊惰の弊風に落ちないことに注意し小作料を輕減し自ら農事改良の研究者となり率先者となることである。法令に依り政策に依つて完全に解決されないとするならば、地主はこの覺悟に立たねばならぬ。農耕は耻づべきではない。太古は支配階級の人々さへ盛德としてこれを行つたのである。不潔であり卑賤であると考へるに到つたのは、商工、贅澤、文明が然らしめたのに過ぎない。然し贅澤、文明の前途は漸く其終を見出さねばならぬ運命に置かれてゐる。新しき立國は農耕を基礎として考へられねばならぬ。武士階級を振り捨てゝ、再び庶民階級の第一位であるお百姓に歸らねばならぬ。「都市勞働者に比して俺達は兄分だ」と云ふ勞農民の自覺を參考とすることが出來る。

地主は都市企業家に比するならば經濟的の弱者である。然し小作農に比するならば優勝な地位と資力を持つ。この地位と資力とは農事の實質的改良に向けられねばならぬ。都市の贅澤を模倣すれば地主は苦境である。然し太古の聖王例へば夏の禹王の如き重農主義に立ち、躬耕して質實の生活に安んずるならば、農具の改良も勞力の節約法も、現在已上に進めることは出來るのである。このことに財力と腦力とを用ふるならば、近代機械力の使用ももつと完全に行はれるであらう。殊に機械化せる農具は殆んど外國大農制の模倣に過ぎない小農制必ずしも機械化されぬ理由はない。たゞこれを機械化するに足る獨創的な能力と熱心がない丈けのことである。かうした改良に資財と勞力とを惜まないことが、現下に處する地主の正しき進路であると斷定することが出來るのである。

小作農の爲めに要求される進路は健全なる小作組合の組織である。何の資力も何の手段も持たない小作農はたゞ團結の力に依つて自分の運命を開拓するより外はない。組合の數は最近著しく增加してゐる。これは團結の力に醒めた反證であると見ることが出來るであらう。組合の組織に對したゞ一つ注意のしたい重大な希望がある。それは組合の內部組織は、何處までも合議的な

民主制に從はねばならぬことである。多くの立憲國の議會は合議的であり民主的であるべき筈になつてゐる。然し完全にこれが行はれてゐる所は殆んど少い。政黨の組織に於いても、合議制よりも獨裁制が行はれてゐる。總裁と云ふ言葉は獨裁者なる意味を持つてゐる。かうした獨裁の背後には必ず金力が潜んでゐる。最近民主制は全權的民主制と、無產的民主制とに分けて考へられるが、多くの國々に於ける所謂民主制は不幸にも全權民主制である。全權を認める限り、農業組合は到底健全な發達を見出すことは出來ぬ。組合の幹部委員の獨裁が行はれる限り、農業組合は眞の威力を持つことは出來ぬと思はれる。組合員は相互の意志を重んじ、何處までも自由合議の形式を維持しなければならぬ。農村の現在としてこれは困難であるかも知れない。然し出來る丈け識者はこの點に留意してかゝる發達を計らなければならぬであらう。

ギルド主義はあらゆる職業組合に對してこの希望を持つてゐる。曰くすべての職業組合が、一團となつて公共の爲めに働くと云ふこと丈けでは尙充分でない。各職業團體の內部は徹底して民主的でなければならぬ。工場でも職場でも農場でもこゝで働く人々の團體が職業組合の基礎にならねばならぬ。大きな政策の基礎はかう云ふ處に置かるべきである。恁うした團體の組織は官僚的獨裁的になり易いが、この危險に陷らないやうに、何處までも民主的であることに努力しなければならぬ。この團體の會議幷びに委員と云ふものが、民主的に規定され行動することが、大なる職業組合の民主的な基礎を確立することになると。[6] 特に農本主義の建設は何處まで民主制を基礎にしなければならぬ經濟上及び社會上の必要がある。健全な農民黨はかうした民主制組合が基礎になつて生れなければならぬであらう。

「都市に對するならば、農村は地主も小作も互ひに提携して商工企業家の累進的利潤に反對しなければならぬ。然し小作農は特にこの抗爭に於いて、都市勞働者との提携を求めなければならぬ。」累進利潤に對して一大斧鉞を加ふることは同じやうに職業組合を組織して企業家と抗爭しつゝある勞働者と、共同戰

線に立たねばならぬ必然に迫られてゐる。これは現に實現しつゝあると云ふよりも、今や世界的の大勢を作りつゝあるのである。レードラードこの事實を次のやうに云つてゐる。[7] 土地農具を所有したり勞働者を雇ふとの出來るやうな農夫は、中流階級又は資本階級の心持を發展させて行つたが、さうでない他の多くの農民は彼等の利害が都市の勞働者と全く接近してゐることを痛切に感じてゐる。その數は彼等は生産力を有するにも係はらず、その收入は少いのであり、且つ近代産業的な資本集中に壓迫されてゐるからであるとしてゐる。尙農村運動が米國では最近著しく社會運動化してゐる理由と事實に付いて下のやうに云つてゐる。[8] 農夫は土地や收獲用の道具は所有してゐるが、その生産物を完全に分配して最後の利益を受けるべき重要なる機關を持つてゐない。鐵道や乳脂罐詰所や荷造所や倉庫の如きものは悉く農民の所有する處になつてはゐない。かう云ふものに對して農民は重大な負擔を忍ばなければならぬ。その關係は都市の勞働者が工場主や機械の所有者に拂はねばならぬと同じ關係である。從つて農民の利潤と工場勞働者と同じことになる。故に社會的な經濟的な爭議に關して、農民は反動思想的の團體に傾かないで、寧ろ前進的傾向を著しく帶んでゐる。殊に西部地方に於いてさうである。最近になつて人民黨とか非政黨同盟と云ふやうな進取的な運動が深く農民を動かすことになつた。一九一二年大統領の總投票には、農業國であるネヴアダとオクラホマとが社會運動側の投票に於いて第一位第二位を占め、多數の農民を持つてゐるアリゾナ、モンタナ、ワシントン、カリフオルニア、イダホ、オレゴン、フロリダなどがそれに次いで多數であつたといつてゐるが、記して以つて參考の料にする。

最後に臨んでたゞ一事を附け加へる。

農民は今や經濟的に弱者中の弱者である。弱者が生存競爭裡に立つて行くのは、互助共存の美德と、弱者に對する一般的な同情とである。農民は相互を理解し合つて互ひに手を取らねばならぬ。そしてこの間から弱きものに對する一般的同情が生れて來るであらう。風聞雉子聲は、天文年中奥州岩城に起つた

百姓一揆の記中を擧げてゐる。農民は結局勝つことになつた。弱者である農民が何うして勝つことが出來たか。それは無意識的な社會全般の同情と云ふものが根柢になつてゐるやうに思はれる。かうした同情はもとよりはつきりしたものではない。然し何とはなしにあらゆる人間の意識の中に、甚だ不明瞭ではあるが、而も根强く根ざしてゐる。ある人間の良心である。我々は感激なしにこの記錄を讀むことは出來ない。

この騷ぎはもと內藤舍人、三村金左衞門と云ふ用人が私慾の爲めに知行所の百姓どもをせめとり、無理非道をしたから、與五衞門と云ふものが江戶へ訴へに出た。處が却つてそれは岩城に入牢させられることになつた。それから色々行きさつがもつれ、農民は內藤、三村の兩家へ押しかけてこれを破壞し、與五衞門を牢から出き出し、一方では更に塀を越ゑて本丸に押しよせた。それからの事情が次のやうに記されてゐる。「この時城中より弓鐵砲、雨のゝごとく放ちけれども、もとより死を一圖に究めし百姓共なれば、射れども打てどもことゝもせ

ず、むしろを竹にからみたる竹たばをもつてふせぎ、すでに本丸の塀を越ゑんとしければ、內藤舍人さきほどより此の體を見て下知しけるは、百姓集とあなどつて不意のあやまちすべからず、此の上は石火矢をもつて一人ものこさずうちとれと其の用意をさしたりける。爰に物頭を勤むる橋本軍平といふもの折節此所にゐあはせけるが、舍人が石火矢の下知を聞きてゆけるは、それ今日此處へおしよするものどもはみな知行所の百姓共也、それになんぞや大敵を防くごとく石火矢などゝは餘り仰山なる御下知にて候。第一江戶へ聞ゑもあり、又隣國の人々に笑はれんも口をしからずや。某思ふ詳細あればしばらく樣子御らん候へと家老用人等をおしとゞめて本丸の櫓に上り、大音によばゝりけるは……かく不敵のしはざ法外千萬、天下國家へ對し亂場なり……何事にても願入筋あらば書付を以つていかにも神妙にそれがしへ申聞くべし」と云つた。そこで農民の代表者が出て事情を述べ、軍平は一子を人質として農民に渡し、首領の所刑はあつたが兎に角平和の間に解決された。

事實はこれ丈けである。然し武力の支持者であり、支配階級である城中のものが、何うして武力に依らずしてこれを解決しようとしたか。內藤は武斷派であつた。然し武斷派が行はれなかつて平和派が事實を解決した。平和派の主張する處に「第一江戸へ聞にもあり、又隣國の人々に笑はれんも口惜しからずや」と云ふにある。專制政府の中心である江戸も、弱者に對する武斷的解決を潔しとしないのであらう。而して隣國の武士その他も弱者に對して武威を揮ふと云ふことは、大人氣ないと見るであらう。大人氣ないと云ふのは、平和の民を治むるには平和な道がある。それに武力に訴へることの拙劣を笑ふのである。若し農民が封建治下に於いて一雜草に過ぎぬものであるならば、かうした外聞を計る必要はないのである。江戸や隣國の外聞を恐れるのは、かうした處置を無道と判斷する良心と同情とが、一般の社會に溢れてゐるからである。弱者でありながら正義である場合、あらゆる同情はこのものに注がれる。そして弱いにかゝはらず相當の要求を通すことが出來る。團結の力は尊重すべきである。然し全人類の一般同情は、知らず識らず弱く且つ正しきものに集つて來ることを忘れてはならぬ。人間としてのこの曙光の輝く未來を翹望しつゝこゝに筆を擱く。

(1) 農政本論　初編
(2) 三省錄　下
(3) 破れ家のつゞくり話　下
(4) W. Sombart, Luxus und Kapitalismus. SS. 73-4.
(5) N. Lenin, The proletarian revolution. Chap. 2.
(6) The policy of guild socialism. Published for the Notional Guild League. 1921.
(7) Laidler, Socialism in thought and action. p. 107.
(8) Laidler, ibid. p. 106.
(9) 風聞雉子聲　上

大正十四年九月七日印刷
大正十四年九月十五日發行

農村對都市の抗爭奥附

定價金貳圓五拾錢

著作兼發行者　京都市上京區聖護院山王町二十八番地　井筒三郎

印刷者　京都市河原町通蛸薬師下ル　井筒三郎

印刷所　伊藤聚英館

著作權所有

發行所　京都市上京區聖護院山王町二十八番地　創成社

終